

自他の尊重

大經に言く「未だ曾て慢恣せず、衆生を愍傷す。」

一日そして一生

「二日の行事尊重すべし。一期の行歩尊重すべし。」

凡夫は時の移るまゝに、今日一日くを無自覚に過し、そして一生を無意味に終る。

しかし無意味にしたことも、やがてはそれが大きな意味を以て迫り、苦悩の大因となる。我を反省すれば、誰でも思い半ばに過ぎるものがある。他日泣かねばならぬ種は大概そこから発している。

兎にも角にも、今日一日だけ、石橋をたゞいて渡る気、水さえ啣んでのむ気、足もとに気をつけて歩ませて頂く、大法を憶念しつつ、我が心の相、口の言うところ、手のするところ、今日一日気をつけて生きさせて頂かう。一生を台なしにするような大失敗も、一生を輝きあらしめるような出発も、ある日の今日なされるのである。

今日一日を尊重するものは必ず一生を尊重する。人生という舞台に登場したことを重々しく考えられる人のみが今日一日を尊重する。

一言一行

「一言尊重すべし。行往坐臥尊重すべし。」

言語はほとんど人格の全てである。軽薄なる人物に軽薄なる言語があり、卑しき人に卑しい言語がある。かかるが故に、言語の軽い人は他人から必ず軽んぜられる。

親鸞聖人は「南無阿弥陀仏」と称えて、不朽の大聖となり、哀れなる場末の寄席の旅芸人は「ナマンダブ」と悲惨なる滑稽を語って漸く口に糊している。同一の語も時により人によつて死活天地の差が出来る。

『安心決定抄』に云く、

「念仏三昧に於て信心決定せん人は、身も南無阿弥陀仏、心も南無阿弥陀仏なりと思ふべきなり。……身を極微に摧くだきて見るとも報佛の功德の染まぬ所はあるべからず。……心を刹那に千割りて見るとも、弥陀の願行の遍ぜぬ所なければ、機法一體にして心も南無阿弥陀仏なり。……吾等が色心二法（身と心のこと）三業（身口意の三業）四威儀（行往坐臥のこと）すべて報佛の功德の至らぬ所なければ、南無の機と阿弥陀仏の片時も離るゝ事なければ、念々みな南無阿弥陀仏なり。されば出づる息、入る息も仏の功德を離るる時分なければみな南無阿弥陀仏の體なり。」と。

一言一行を尊重するというのも、絶対不二の大道の生きたまうことによつてのみ、如実となるを知るべきである。されば行住坐臥久遠の眞実を憶念すべきである。

自他の尊重

「己が生活尊重すべし。他人の生活尊重すべし。」

一人の人尊重すべし。万人悉く尊重すべし。」
己を尊重するものは、他を尊重し、己が生活を厳粛に考えるものは、他の生活を厳粛に考える。

真実に聞其名号信心歡喜の世界に生かされたものが、一度み法の会座にあるや、首を動かさず、眼をそらさず、一言も聞きもらさじと、善知識を尊重し、大法を尊重し、会座を尊重し、同行善知識を尊重する。これによつて大信自らその人に充滿して、千萬金の重き人格となるのである。久遠劫の古より尽未來際にわたつて、たつた一度の尊重なる時を得る者は、我をしてここに至らしめたる因縁の全てを、尊くも有難く拝むが故に、過古に会いたる一一の人、一一の経験、一一の世界、全てものを言わざるものはなく、深い人生の意味を大慈悲によつて見出すのである。

然るにかくも尊き時と所を持たざるものは、風に首振る張子の虎の如く、右顧左眄、如何に尊き時も所も、ただ二束三文にすぎし、首を振り眼を転じ、猫の錦に居るに異ならず。己を尊重せざるが故に他を尊重せず、隼きものをも尊ばざるが故に、己も遂に何ものをも得ずして浅薄な世界をおわるのである。

仏菩薩は必ず一一の衆生を尊重したまう。「哀愍衆生」とは、大悲衆生を尊重したまうの謂である。一文不知の老婆と言えども、世尊の眼には絶対である。さればこそ、至愚の周梨槃得も尊者となり、下賤の優婆利も尊者となる。公侯もとより尊ぶべし。一老一婆尊ぶべし。しかるに凡夫名利の子、大廈高楼、権勢名利に叩頭して、拝むべきを拝まず、尊ぶべきを尊ばず。一切大衆の心を蹂躪するが故に、彼を尊む者はないのである。尊重の問題は、畢責、自覚の問題である。

利己と輕薄

「己を尊重するかに見えて、人を侮るを利己といい
他人を尊重するかに見えて、己を侮るを諂曲てんきくと言う。」

自己を尊重するように見えても、それによつて他人を侮り、自ら僥慢の頂に上つて
いるのは、決して自己を尊重してゐるのではない。それは食欲の利己心にすぎない。
氣取れば氣取るほどおかしく、高ぶれば高ぶるほど人は見下げる。

他人を尊重するかに見えても、己を侮り、己を傷つけ、お世辞、へつらい等によつ
て他の歡心を買わんとするは諂曲である、諂曲の心は極めて輕薄である。他を尊重す
るに似て、貪欲の奴隸となつて己を売るのみである。

上にへつらう者は下を侮り、上に反逆するものは下にへつらう。尊他なき自尊は人
を虐げ、自尊なき尊他は人を偽く。

己を下げ、相手の徳を上げるを恭敬という。合掌恭敬は、仏家の行儀なるも、己を
下げる恭敬の中には微塵も己を侮る輕薄あるべからず。金剛の信心に住して動かざ
るは仏子の日常なるも、絶対の信心に、人を侮る利己僥慢あるべからず。

内に充実するものは外にたよらず。他人の些々たる誤解にすら怒るものは、自らを
侮るもの。金は誤解せられても金であり、蘭は、垣根にあると、貴人の側にあるとに
よつて芳香を異にせず。他を侮るものも滅び、己を侮る者も亡ぶ。自尊、尊他の二尊
は遂に一尊にすぎず。かかるが故に

「真実の自尊、尊他を生み、尊他は必ず自尊を成就す。」

大法のみ

「大法のみ自他の生存に重き価値を与えたまふ。」

世尊は真実教を説いて、衆生を救いたまい、衆生は、真実の教を聞信して如来に救われる。救われるとは、名号の真実功德を廻向せられることである。

「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は萬の事みなもてそらごとたはごと眞實あること無きに念仏のみぞまことにて在します。」

誠に、無常そらごとの世に、そらごとの不満を、そらごとによって充たさんとし、そらごとが、そらごとを追うてそらごとにおわる。

「一切の群生海、無始より己来、乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心無く、虚仮諂偽にして真実の心無し。是を以つて、如来一切苦悩の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に於て、菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修一念一刹那も清浄ならざる無く、真心ならざる無し。如来清浄の真心を以て、円融無碍不可思議不可称不可説の至徳を成就したまへり。如来の至心を以て、諸有の一切煩惱悪業邪智の群生海に回施したまへり。」(信卷)

そらごとの世に、如来久遠の真実を回施して、真実人生の白道となりたまうのである。虚仮の世に真実を回向して真実金剛の大信を成就したまう。念仏する時、そらごととたわごと真実あることなきを知れば知るだけ、久遠の真実が念仏となつて人生の具体的内容となりたまうを知るのである。念仏する時、世間虚仮、唯仏是真、相對差別のそらごとの世界がそらごととわかると共に、絶対真実の一面もほのかにわかるのである。

如何に、人生の迷の闇は深くとも、生死煩惱はしげくとも、尊卑、善悪、賢愚等々の九品の差別は高くとも、そのそらごととたわごとのうちに、如来の大悲は常住真実なる功德宝海を回向して、尊重すべき人生を成就したまうのである。

「本願一乗は、頓極頓速円融円満之教なれば、絶対不二之教、一実真如之道也。」(愚禿抄)

絶対不二の教によつてのみ、自他尊重の道の成就することを知るべきである。

世尊は一切を拝みたまい、最後の一人をすら捨てたまわず、悪人を正機として、恵むに真実之利を以てしたまうのである。

「世尊は一切を拝みたまうが故に唯我独尊とのたまう。」